

2021年1月24日 久宝教会 降誕節第5主日礼拝

メッセージ「すぐそばにある福の音」

牛田匡牧師

聖書 ローマの信徒への手紙 1章8-17節

教会では「福音」という言葉が、当たり前のように、よく語られて、耳にします。「福の音」と書いて、「ふくおん」ではなく、「ふくいん」と読みます。それこそ新約聖書の冒頭には、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネという四つの「福音書」が並んでいます。ですが「福音」とは、一体どういう意味なのでしょう。か。「福音」は英語では「Good News」ですから、日本語では「よい知らせ」という意味だと聞くことがあります。しかし、「よい知らせ」というのであれば、日本語ではむしろ「朗報」という言葉があります。おそらく「福音」という言葉は、中国で漢語に訳された「漢訳聖書」を經由して、日本に聖書が入って来た影響なのではないかと思えます。

「福音」と訳されている元々のギリシア語「エウアンゲリオン」を、当時の人々はどのような時に使っていたか、何を「朗報」だと考えていたかと言うと、それは主に戦争に勝った時の、勝利を伝える伝令の言葉だったそうです。いつの時代にあっても、戦争に勝つか負けるかということは、常に一大事でした。陸上競技の「マラソン」の語源となった話として有名ですが、紀元前5世紀にあった「マラトンの戦い」での勝利を、一人の兵士が約40キロ離れたアテナイの町まで走って伝えたと言われています。それが元々の「福音」「朗報」でした。

後に紀元前1世紀に、ローマ帝国の初代皇帝となったオクタウィアヌスは、自ら「神なる者」という意味である「アウグストゥス」と名乗り、神殿には「神なるアウグストゥスの誕生の日は、この世における福音・朗報の始まりである」（プリエネ碑文）と刻ませていました。つまり、ローマ帝国は、強大な軍事力、暴力によって、搾取という帝国支配を、パレスチナを始めとした各地で支配されていた人々に対して、「福音」「朗報」として受け入れさせていたわけです。ですから、イエス様やパウロが生きた紀元1世

紀の地中海世界における「福音」「朗報」とは、まさにローマ帝国の強大な軍事力による帝国支配、「ローマによる平和 (Pax Romana)」を意味していました。そのような時代に、パウロはローマ帝国による福音とは全く別の福音を<sup>の</sup>宣べ伝えました。

この「福音」という言葉は、新約聖書の中で、とりわけパウロの手紙に多く用いられている言葉です。パウロの手紙は、福音書よりも早く、古い時代に書かれたと考えられていますので、そのことから、まずパウロが「イエス・キリストの福音」「神の子の福音」という言葉を、新しい福音・朗報の意味で用いて、広めていき、それが最初期の教会の中で次第に定着し、福音書にも記されて行ったのだらうと考えられます。では、パウロが伝えたいと願ってやまなかったその「福音」とは、一体何だったのでしょうか。

今回の聖書は、パウロがその宣教活動の終わり近くに執筆した『ローマの信徒への手紙』でした。新約聖書にはパウロが各地の教会に宛てて書いた手紙が納められていますが、このローマの教会だけは、パウロ自身が設立したわけではない教会でした。さらに、13節には「何度もそちらに行こうとしたのですが、今まで<sup>さまた</sup>妨げられているのです」とある通り、詳しい理由は分かりませんが、訪問したいと願いながらも、まだ一度も訪問したことがない教会の人々に宛てて書いた手紙だと考えられています。パウロは、まだ見ぬ、そして自らが設立したわけではないローマの教会の人々に対して、そこへの訪問を視野に入れつつ、自己紹介的に自分の思想について、この手紙に書きました。今回の箇所は、その冒頭1章であり、手紙の始めの挨拶として、感謝とローマ訪問の希望について述べられています。

首都ローマには、様々な国の人々が集まっていました。パウロは14節で「私には、ギリシア人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも、果たすべき責任があります」と言っていますが、ここで言われている「未開の人」とは「ギリシア語を話さない人」のこと、「知恵のある人」とはギリシア人、「知恵のない人」とはギリシア人ではない人のことで、当時のギリシア人が外国の人たちを軽蔑して呼ぶ言葉だったようです。そんな差別語を無頓着に使っているパウロですが、言いたかったことは、たとえ何人<sup>なにじん</sup>

であったとしても、全ての人に、福音を告げ知らせたいということでした。

16節ではパウロは「私は福音を恥としません」と断言しています。ということは、パウロやローマの教会の周りには、その福音を「恥ずかしいもの」としてバカにしていた人たちがいたのでしょう。何が恥ずかしかったのか。それは恐らく罪人が架けられる十字架刑で、無力の内に殺されたナザレのイエスという人を救い主だと言っていたこと。さらにその人が死から引き起こされたと言っていたこと。それらのことが周りの人たち、ユダヤ人からもギリシア人からも、理解できない、愚かなものだと言われていたのだと思います（1コリント1：18-25）。

しかし、パウロは断言しています。「福音は神の力です」（16）。決して人の力ではありません。暴力と恐怖によって人々を支配することは、福音ではありません。人間の常識、理屈、理解を越えて、無力の中に働く神、呪われていると考えられていた処刑によって殺された者を、死から引き起こされた神（ガラテヤ3：13）……、そんな逆説的な神の働きこそが、パウロが身をもって体験した福音だったのだと思います。

青野<sup>たしお</sup>太潮さんという聖書学者によると、「イエス様は私たちの罪のために、十字架に架かって死んで下さった」というキリスト教で一般的に語られる表現は、新約聖書のどこにも見出すことができないのだそうです。それらは後のキリスト教の歴史の中で形作られて来た理解であって、元々、歴史の中を歩まれたイエス様が、「福音の中心」として示された事柄は、むしろいつでもどこでも神が共にいて下さる「インマヌエル」という事実と、「無条件で徹底的な愛とゆるし」の2つだっただろうと言われています（『どう読むか、新約聖書』）。確かに、福音書に記されているイエス様の言葉と振る舞いは、一貫してその二つを、身をもって告げ知らせている歩みでした。

今回の招きの詞は、イエス様が宣教の開始にあたって、言われた言葉でした。新共同訳でも聖書協会共同訳でも「悔い改めよ、天の国は近づいた」（マタイ4：17）と訳されていますが、「天の国は近づいた」は完了形ですから、正しくは「天の国はもう来ている」です。だからこそ、自分の立ち位置を改めて、逆説的に働かれる神、低みにおいて働かれる神様の視点、価

値観で、見つめ直しなさい、というわけです。

今回のパウロの最後の言葉、17節の「神の義が、福音の内に、真実により信仰へと啓示<sup>けいじ</sup>されているからです。『正しい者は信仰によって生きる』と書いてある通りです」は、難しくで一読しても分かりにくいのですが、釜ヶ崎の本田哲郎先生の訳では、次のように訳されています。

「神の正義（解放）の働きは、福音に信頼してあゆみを起こせば起こすほど、明らかになってきます。聖書に書いてあるとおりです。

『正義（解放）を生きる人は、信頼をもってあゆみを起こして、いのちを得る』。

聖書に示されている神様の正しさ、正義は、私たち自身がその福音、神様が共にいて下さって、赦し、支えて下さっているということに信頼し、低みに立って歩みを起こせば起こすほど、身をもって明らかにされてくる。そこに神様と共に生きる、新しい命、生活があるということなのでしょう。

さて、歴史の中を歩まれたイエス様や、パウロから約 2000 年を経た今、私たちにとっての福音とは何でしょうか。アメリカの民主党支持者にとっては、トランプ前大統領に代わって、バイデン新大統領の就任が、一番の朗報、福音だったかもしれません。またコロナで苦しんでいる世界中の人々、とくに医療現場で働いている医療従事者の方々にとっては、ワクチンや治療薬こそが、福音なのではないかと思います。しかし、その一方では、利権を貪<sup>むさぼ</sup>っている一部の人々もいます。「国民目線で……」と政治家が語る時、その目の中には誰が入っていて、誰が入っていないのか。恐らく、大多数の人は、その目の中に入っていないのではないかと思えてなりません。

神様は、人間の思いや価値判断を越えて働かれます。人の目から見れば、弱く、愚かで、つまずき、呪いでしかないものを、強く、賢く、救い、祝福へと変えられます。福音はどこにあるのか。福音はすぐそばにある……。いつも私たちと共にいて下さって、赦し、支えて下さっている神様の働き。人が目を注がないような場所にこそ現われる神様の福音。そんな「福の音」に信頼して、私たちも神様と共に低みから歩みを起こす者へと、変えられ、導かれて行きます。